

伊藤信孝

チェンマイ大学客員教授・工学部

世界経済フォーラムが発表した「世界を変えた日本の革新技术」は次の5つと言われる。新幹線(1964)、小型計算機(1970)、ウオークマン(1979)、青色発光ダイオード(1990)。いずれもジャパン・アズ・ナンバーワン(Japan as No. 1)の世界を驚嘆させた時代の技術の産品と言えよう。こうした技術が世界で高く評価され国際社会に受容されてきた背景には、他に真似のできない、また追従を許さない独創的なアイデアとそれを可能とする加工・組み立て技術があったからと言えよう。ホンダがイギリスのマン島でのオートバイ・レースで5位までをぶっちぎりで優勝したニュースは既にかいたが、このレースの後でバイクのエンジンを分解した結果にまたも驚いたと言う。それはスイスの時計の如く精密で、しかも何処の製品のコピーでも無かったと言う。筆者は大学生の時、伊勢志摩に来る外国人観光客が、そこでの観光を終えて京都に向かう列車の中に入って行って英会話の機会としたが、欧米から来る観光客の多くは、日本の他の自動車企業の名前は知らなくてもホンダの名前は殆どに知れ渡っていた。折しもホンダは鈴鹿工場で世界的に長期のドル箱となったスーパー・カブ(Super Cub)の生産を始めた。続いてF1国際レーシングコースも作り、モータリゼーション(Motorization)の大きな発展への礎を築いた。どうして日本が世界の技術をリードすることができたのかと言えば、独創的なアイデア、それを具現化する製造設備機械、持続的な探究心に基づく勤勉性など、いろいろあるが、やはり基本は独創的なアイデアが無ければ世界をリードする技術は生まれない。日本人ノーベル賞受賞者が毎年かのように現れる現実は、日本の技術が高く評価されている事に他ならない。ここで何故日本の技術について書くかと言うと、それが如何に世界をリードしてきたかを説明する為であり、それにはそのレベルに対応できる人材の育成(Human Resource Development)が重要であるからである。高度な知識を理解する高い能力の保持は言うに及ばないが、強いやる気(モチベーション)を信念として、あるいはそれが自らのミッションであると言うレベルの意識を堅持する人材の育成に他ならない。如何にすればそうした人材を育成できるかは教育の重要な課題である。

本報では、高等教育を受けた科学技術者の人材を育成する為の過程の一つである学会(Academic society)のあり方、対応について私見を述べる。当初5月の初めに予定されていた学会の発表申し込みが3月の中旬頃であったのだろうか。それでもこの申し込み締め切りは一度設定されたものよりいくらか

遅れた締め切り日の再設定であった。申し込み締め切りが再延長された事を知った筆者は「それなら未だ間に合う」と判断し、アブストラクト (Abstract) を提出し、しばらくしてフル・ペーパー (Full paper) を提出した。しかし残念ながら、2019 年末から感染が拡大しつつあったコロナ・ウイルスの感染が拡大の状況にあり、この学会に関しては、殆ど登録手続きは終わったかに見えていたが、全てが延期され、登録手続きもあらためて最初からしなければならなくなったようである。5 月初旬の開催予定日は 7 月末に延期され、しかも状況によっては物理的に開催地に出向くのではなく、オンラインでの開催になった。筆者にとって極めてやっかいだったのは、既に指定された様式に沿ってまとめ上げたフルペーパーを新しく設定された様式 (Format) に書き換えねばならない事態になった事である。既に受理されていたと聞かされていた筆者の論文はあらためて無記名の 2 名の査読者 (Double blind reviewer) によって査読され、閲読者のコメントと質問が付加されていた。また英文についてもわずかではあるが修正を促す閲読結果が添付されていた。早々にこの閲読結果に基づいて修正を施し、あらためて返送した。従来と異なり、これら全ての手続きは全てオンラインで行わねばならず、慣れていない筆者には多少負担であったが、何とか期限に間に合うよう準備し、手続きを終えた。主催者側からも手続きと登録完了の報を得ていたので安堵して、しかるべき講演発表時に臨めると想っていた。ところが、講演発表の時間が来て講演を始めると、決められた時間内に発表が終わるのではなく、大幅に時間を延長し、残された質疑応答の時間が無くなるという事態を避ける必要から、講演発表時間を 10 分内に収まるよう、さらにこの時間の範囲内で確実に終わる公演ビデオを新たに作ってオンラインでアップロードして欲しいと言う連絡がきた。しかもそのビデオを指定された締め切り日までにアップロード (Upload) せよ、と言う事である。この連絡がメールで来たその日が締め切りになっていたもので、これでは余りにも対応が難しい旨を返信し、「どうしてもと言うなら努力はするが、最悪の場合、参加を取りやめたい旨したためた。全ての登録、参加をキャンセルすることはやめてくれ、との返信が来たが、いささか腹の立つ話しである。コロナ禍で予定が延期になることは承知しているが、いつも対応が極めて切羽詰まった時点で行われるために、戸惑いで慌てざるをえない。しかもその時期に至る迄に多くの時間が有るにも関わらず、だんまりを保ち、時期が迫った間近になって無理とも想われる対応となるのがタイ式の普通のイベント開催である。設定期日までに要旨を提出し、登録と一緒に申し込みとアナウンスメントに指示されていても殆どの場合、期限通りに事が運ぶことは希である。うっかり期日を見逃したと思って、諦めてウェブにアクセスすると締め切り日が延期になっている。それならば未だ間に合うと判断して、慌てて準備して対応するとしばらく連絡が無く、かなり重要

な時期が近づいて来た時点で新たな対応（例えば論文の修正など）を求められる。登録を申し込んだ参加希望者は、殆ど忘れかけているところにそうした連絡がくるから、極めて不愉快になる。期待と希望を持って参加したと言う参加希望者のやる気を削ぐような事態に陥る。そんなくらいなら、参加をキャンセルしたいと言う気持ちも出てくる。なぜ、こうした事が繰り返されているのかは、種々考えられる

- 1) 主催者側のイベント企画と実施に対する目的意識と責任感の欠如
- 2) 時間までに提出が間に合わない積年の悪しき慣行が行き渡り、その改善を阻んでいる。
- 3) 主催者側の末端業務担当者の意識が学会開催を「単なる仕事」と捉えているだけで、将来の科学者、技術者人材育成を司るという高貴な意識が欠如している。参加者、発表者にとっては学会での発表は自分の将来を決める重要なイベントの一つである。
- 4) 学会の組織における重要ポスト占有者がどの程度、上記の事項を意識、認識、理解しているか。ひょっとすると自分のポストを守ることにのみ注力してはいないだろうか。

学会やシンポジウムなどの学術的イベントは学生、院生、若い研究者にとっては重要な研究論文発表の場であり、また学位取得に必要なプロセスの一つである。こうした機会に論文発表をしたと言う実績は重要である。それだけに登録手続きに多大の労力や時間が必要となると、当然のことながら余分な仕事が増える。それも短期間であれば、それほどの負担を感じないが、長期に亘り、しかも手続きが複雑になると、「それならば、敢えて参加して発表しなくても良い」と割り切る人が多くなる。このことは本来の学術的活動の本質とは殆ど関係の無い余分な事柄であるから、参加発表の機会を逃すのは本末転倒である。参加登録手続きが、できるだけ容易に、簡単に、しかも迅速にできる事が必要である。新しいシステムでの参加登録申し込みは、主催者側にとって便利で都合の良い視点で導入されることが多い。参加者の目線で参加しやすい環境を作る必要がある。小さな学会（会員数の少ない学会）では、会員数が少ないから組織運営にも支障が出る。大きなイベント企画が難しい。いうまでもなく社会的に高い評価、あるいは入会による会員のメリットにより会員数は左右されるが、次世代の人材育成における学会の役割を忘れては成らない。しかし学閥などが今でも少なからずグループ作り醸成に悪い影響を及ぼしているのも残念である。いわゆる「学術」とは余り関係の無い「政治」が未だに優先して幅をきかせているのは寂しい限りである。もちろん言うまでも無く、新しい登録申請システムの導入は、主催者側にとって都合の良いと言う観点からではなく、参

加登録者にとって、やりやすいシステムで無ければ成らない。参加登録する側も新しいシステムに順応できる努力も必要である。何処の組織でも組織管理運営責任者に何処までの「本気度」があるかが論点になる。いくら優れたアイデアに基づく論文や、提案が出てきても、それを正当に評価し、採用し、実施までを円滑に行う指導者は少ない。まずは自らのポスト、身分を優先的に見回して、決断をする。だから実施に至らないとその責任者が任期を終えるまでは放置される。極めて無駄である。間違った判断をする為政者が出てこないためにも、次世代を担う人材育成は極めて重要である。たかが学会の企画実施における、参加登録日の延長と言うレベルの認識ではなく、組織構成員が、特に上層部の管理運営に携わるリーダーがこの重要性を十分に認識し、「本気度」を示した行動が見られない限り、モチベーション以上に失望の方が多く、参加したいと言う雰囲気にならないし、組織も大きく成長しない。このままの状況が何時まで繰り返され、続くのか、大学人の使命と役割に関する自覚、認識、特に人材育成教育の推進への「本気度」に今ひとつ懐疑的である。

さて、この話にはまだ続きがある。学会の企画委員会のメンバーの一人と登録手続きについて話をし、要旨、論文、登録料金支払いなど、一連の手続きに間違いが無いかを確認して最終的に話を終えたかに見えたが、翌日になってまたしても最終確認と想われる連絡が企画委員会からメールであった。それには論文は提出したか、登録料金は支払ったか、まだであれば早急に、今週中に全てを終了せよ、との催促である。昨日「委員の一人と確認したではないか」と、またしてもメールにて説明をしなければ成らない。これこそ無駄であり、学会への不信感が募る。いわゆる学会での論文発表が主たる目的であるにも拘わらず、それ以前の手続きのレベルで不快な思いを為なければ成らないことが、学会の会員増を妨げている。何故こうした事が生じるかと言うと、参加登録における会員全てに対して個々に調査をし、本当に手続きを終えた会員とそうでない会員とを明確に区別して、手続きを終えていない会員のみ連絡をすれば良いのに、面倒くさいから全員にメールを送りつけるから、不快に思う会員が当然出てくる。学会開催の当日までに、またしても余分な仕事が増えた事への早急な対応を強られることが、余分な不愉快さを植え付け、学会での発表に精神的に苦痛を作る。企画委員会の中でのコミュニケーションができていないから、このような事が起きる。それによって学会へのイメージがダウンし、学会そのものが一つも良くなる。企画委員のひとりひとりが、自らの仕事に対する認識と責任感が異なり、単に仕事のみを期日までにして手当を貰えば良いと言う単純な認識だから、いつまで経っても同じレベルの対応から改善されない。研究プロジェクトでリサーチ・アシスタント(Research Assistant)やリサーチ・アソシエイト(Research Associate)をパートタイマー (Part timer)で雇用

する。彼らはパート・タイムワーカーの学生や労働者の場合も同じで、自分が何を為しているかは分からなくても、とにかく「言われた通りに、言われた量の仕事をこなせば良い」と言うだけの感覚で仕事をしてきたものが多いので、でき上がった成果を全面的に信じ込むと、時には「とんでもない結果」をうかつに発表する事になる。

また、学会の当日が来て、開会式に始まるプログラムから閉会式迄の間に、新規に新たな出会いを持つ機会が多い。発表前に自己紹介を済ませ、いざ発表となると、パチ、パチとスライドを写真に収めている。そこで「その必要は無い、後でPPT資料のファイルを差し上げるから」というと写真撮影はやめる。しかし自己紹介の時に殆どの「新規」に知り合った相手から「名刺交換」をすることは殆ど無い。だからそうした資料を送りたくても、送る宛先が分からない。まずは学会に出てくる姿勢に問題がある。自らが関心のある研究情報を知りたいと想えば、その研究者に積極的に近づき、話しかけて名刺交換をするのが基本であるが、いつも「自分は名刺を持ちあわせていないので」と謝る参加者が多い。学会は新たな出会いの場であり、研究、教育を通じて相互に知り合い、未知の探求、人材育成に必要と想われる情報を入手することに大きな意義がある。新しく知り合っても、その後メールが来ることも少なく、折角の出会いも瞬間的に消えてしまう。なんと非効率で無駄なことかと考えさせられる。せつかく参加登録費を払うのであれば、できるだけ多くのプログラムやセッションに出て多くの人を知るというのではなく、自分の発表が済むとそそくさと帰路の途につく参加者を多く目にする。名刺交換は必要、かつ重要である。筆者が立ち上げた国際ジョイント・セミナー・シンポジウムに参加の学生は、かつての参加者である先輩から聞いて、事前に自分で名刺を作り、多くの友人を作った。1年ほど前に筆者が招待された国際ワークショップに2名の学生を参加させるべく連れて行った。事前に名刺作成を指示しておいた関係でワークショップの終わりの段階で、知人の海外の大学教員から非常に喜ばれ、高く評価された。国際学会やシンポジウム、ワークショップに関し、筆者が常に強調していることは、これらのイベントが単に学術的研究論文発表の為の物では無く、新しく友人、知人を作り、相互信頼、相互理解を深め、将来に向けたネットワークを構築すること、それにより国際化を推進すると言うのがある。相手を知り、自分を相手に知って貰うためにも名刺の準備もせずにイベントに参加することは、イベントへの本質的参加のための理解が十分でないか、異なった理解で終わっていると筆者は考えている。国際化とは人により理解のレベルや中身も異なるが、エチケットやマナー、国際常識、礼儀と言ったところである。また国際法の遵守のもとで、フェアに相互協力、競争、和を維持できる「協調と競争 (Collaboration & Competition)」の精神の育成、が含まれていることを忘

れては成らない。名刺を用意せず、そうしたイベントに参加することは、初めから相手に自らを知って貰いたいと想う気持ちが無い事に等しい。この姿勢を続ける限り知人も友人も増えない。情報の共有や意見交換、ましてやコラボレーションなどと言うレベルには程遠い。自ら積極的に自分を知って貰う公道を起こさない限りネットワークは広がらない。口ではコラボと言っている、いざ連絡を取ろうとしたときに手元に連絡先がないから、一度きりの出会いで終わる。何故名刺を用意しないのか、その理由は定かではないが、決して良いことではない。他人から学ぶには自分も提供出来る者が無ければ意味がない。コラボという割には個人プレイが多い、と言うのが筆者のタイの大学人観である。自らが閉じこもり、オープンな姿勢を示さなければ、相手も警戒して、あるいは必要が無いから近づいてこない。自らのアイデアを採られたくないと言う警戒心が働いているとしたら、余りにも傲慢である。学術的イベントに参加することは多くの他人から多くを学ぶ事にある。自分のレベルを自分で自己満足しているとしたら、それ以上の発展はない。かつて少なくとも2つ以上のタイの大学からの要請で「大学院の学生、特に博士課程の学生に論文の書き方について指導して欲しい」との要請を受けて出向いた。毎週1回特定の曜日の半日（例えば午前中など）を用意された部屋に出向いて、該当（質問のある）の学生が来るのを待つという形式である。時には来るが時には誰も来ないと言う状況である。これでは時間の無駄である。異なるトピックを研究対象としているのであってもひとりひとりが個々の都合で必要に応じて相談に来るという対応では心胆は見込めない。同じ時間を共有し、各自が次々と自己の研究についてプレゼンを行い定期的に進展度を披露するというので無ければ、自らがどのレベルにあるのかを知ることができない。一堂に会して順序立ててプレゼンをすることで他人の研究内容、発表の仕方、資料作成、などを自分と比較して判断できる。いわゆる他人から学ぶ事で自分の弱点、欠点を発見、修正、改善できるのである。自分の聞きたいところだけ聞くというちっぽけな考えは、自らを自動的に隔離し、「これで良いのだ」と言う間違った「メッセージ」を信じ込む事になる。時代は学生的研究が増えつつある中で、他人の研究に目もくれず、自己の論文作成のみに注力して居ると時代遅れの人材しか育たない。ここにオリジナリティな研究が生まれられない原因があるとヒスアハ三重居る。基本的姿勢をあらためて考え直す必要がある。さもなければ社会が求める人材育成は成されず、進展はない。結果としてオリジナリティのある研究は出てこない。教育研究に於ける抜本的改革が早急に必要であると言うのが、タイの大学に対する筆者の見方である。



グループ・セッションでのプロジェクト検討会